

24 開国と日本の歯科

新藤 恵久

一、横浜居留地の外人歯科医と日本の歯科医療

安政六年（一八五九）、横浜に開港場が設けられ、半植民地的貿易が開始されると、一獲千金を夢見る内外人たちが横浜は賑わった。この中には、はからずも日本への近代歯科の紹介者となった歯科医もあった。横浜居留地で開業した最初の外人歯科医はイーストレーキで、そのほかウイン、エリオット、パーキンス、アレキサンドルがある。

こうした外人歯科医の治療をうけるため、明治の高官たちが蒸気船に乗って霊岸島から横浜へ通った様子が木戸孝允の日記からうかがうことが出来る。孝允の治療にあたった米人エリオットが横浜にやって来たのは、明治三年（二年との説もある）、三〇歳の時で、明治八年に帰国

するまで、彼の助手として働いた日本人に小幡英之助、佐治職、松岡萬蔵がある。

「木戸孝允日記」にあらわれる歯科に関する記載は、明治三年から始まる。

明治三年九月二日 曇

「余大隈に至り伊達公に逢今日より横浜に至り齒痛を洋医に見せんと欲す。山県狂助同行の約なり伊藤も来俄に横浜行を催せり 十一字頃相発し三字横浜に達し通商司役所遠藤の寓に達せり：後略」

この日、エリオットに診療を拒否された孝允は、やむなく横浜に一泊し、ヘボンよりエリオットへの紹介状をもらい、翌日ようやく診察をうけることができた。政府の高官でもこのような有様で、開国まもない日本での外人の日本人に対する侮蔑と特権意識は目に余るものであった。

また、横浜から築地入町で開業していたアレキサンドルについて次のような記事がある。

「南八丁堀二丁目佐賀県土族中島某方へ去十五日午前十一時頃入船町に寄留せる仏国人アレキサンドルといへ

るもの突然入り来り某が兼て畜ひおける洋犬を会釈もなく連れ去りけるゆへ某ハ直に追ひゆき掛合に及びたれども種々の暴言申し張り終に返さざりしよし其後如何なせしを知らず：中略：例の日本人を侮る心より為せしものか」〔朝野新聞〕明治八年二月十九日。彼は、はじめ浜田藩に砲術師範の触れ込みでやって来たが失敗、いつの間にか横浜に現れ歯科をはじめたという。居留地の歯科医師はこんな連中が殆どであつたのであろう。急速な近代化政策を掲げる明治政府が招聘した「お雇い外国人」とは異なり、彼らが日本の歯科の近代化に積極的に貢献した痕跡は見当たらない。近代歯科の開拓は日本人自身の手で行われたのである。

二、現在の有床義歯の理論が欧米で発見されたのは一九〇〇年のことである。一方、わが国では材料こそ異なるが、この理論は十二世紀にはすでに実用化され、現在までに発見された世界最古の有床義歯は、一五三八年に七六歳で往生した仏姫の上顎総義歯である。こうした木床義歯は、手工業の黄金期を迎えた近世には、審美的にも実用的にも現代の義歯に遜色のないものが完成され

た。この義歯制作の技術は封建社会的な性格を持った徒弟制度のもとで秘術として伝承されてきた。この伝統が崩壊したのは開国による近代歯科の伝来で、危機感を持った入歯師たちは、講習会を開いて技術の交流をはかるようになった。その結果、木床義歯は床の維持に欧米の金属製のクラスプを、また複雑な制作技術を要した前歯には既製の輸入陶歯を使うなど種々の工夫がこらされるようになった。